

新聞小說史

昭和篇

新聞小説史

昭和篇II

著者略歴

明38年12月 福井市生
 昭2年4月 国民新聞入社
 昭5年3月 読売新聞社会部に移る
 昭6年9月 大阪毎日新聞社会部に移る
 昭10年2月 長春で大新京日報創刊
 昭13年9月 南京支局長
 昭14年5月 読売新聞退社、北京で東亜新報を創刊、主筆となる
 昭20年8月 北京で敗戦を迎え、国民政府中央宣伝部に留用される、華北日報日文版を担当
 昭21年3月 華北日報退社、5月帰国
 昭21年7月 三たび読売新聞入社、論説委員となる
 昭24年4月 コラム「編集手帳」担当
 昭31年4月 小説委員会委員となる
 昭35年12月 定年延長、コラム書き続ける
 昭47年11月 論説委員会顧問をやめる
 昭48年1月 読売新聞社社友となる
 昭49年3月 芸術選奨文部大臣賞を受賞
 昭56年6月7日 長野県茅野市にて死去

主な著書

昭18年6月 「北京横丁」 大阪屋号
 昭18年7月 「北京百景」 新民印書館
 昭27年6月 「生きている日本史」 鱗書房
 昭27年10月 「日本という名の独立国」 河出書房
 昭32年2月 「生きている中国史」 河出書房
 昭39年4月 「新聞小説史稿」 三友社
 昭42年4月 「紅衛兵」 合同出版社
 昭42年11月 「毛沢東の青春」 講談社
 昭44年2月 「東南アジアの夜明け」 読売新聞社
 昭45年5月 「唐詩選の旅」 講談社
 昭48年4月 「金日成謎物語」 番町書房
 昭49年12月 「新聞小説史 明治篇」 国書刊行会
 昭51年12月 「新聞小説史 大正篇」 国書刊行会
 昭53年4月 「白頭山に燃える」 現代史出版会
 昭53年5月 「新聞走馬灯」 地産出版
 昭55年12月 「北京歳時記」 永田書房

新聞小説史 昭和篇II

昭和56年11月20日 印刷

昭和56年11月25日 発行

定価 6,500円

著作権者との
 申合せにより
 検印省略

著者 高木健夫

著作権者 高木有為

発行者 佐藤今朝夫

制作・島村千代子

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18

発行所 株式会社国書刊行会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 印刷・セイユウ写真印刷(株) 製本・青木製本

昭和篇Ⅱ

I 永井荷風の「溷東綺譚」

——木村莊八の挿画物語——

「朝日」荷風のすれ違い

「終日執筆更に倦まず」

運命を賭けた名挿し絵

「新聞記者は応待せず」

「朝日」岩波に敗北

荷風門弟、邦枝完二

「朝」「読」の荷風詣で

原稿料をめぐる……

単行本と新聞のちがい

「意外に当り候」

モデル、種田政明

287

II 文学統制と新聞小説

——小汀利得と子母沢寛——

連載物の花畑の中に

情感を盛る線描

清方から雪岱へ

「新選組始末記」

退社の動機「城戸事件」

編集局長と作者の意気

鏡花調か雪岱調か

小説に口出す社長

戦時下の大衆小説

「内職はよし給え」

育ての親・小汀利得

320

III プロ文学と小説の神様

——片岡鉄兵と横光利一——

352

目次

「恩に酬ゆる気持」	浪人して知る淋しさ
社会部長・バーで夜勤	「時の敗者」の成功
紫煙に浮ぶ鬼気の形相	新聞とプロレタリア文学
片岡鉄兵の器用さ	社会主義的新感覚
市井・人民・武田麟太郎	プロ文学の星雲期に
「小説の神様」登場	純文学の通俗小説化
森敦「酩酊船」の経緯	「神様」の大旅行
騒然、人民戦線のバリ	文豪荷風と競作
IV 川口松太郎と岩田専太郎	
——鈴木康三少佐の「威力」——	401
七十九歳の筆力	懸賞小説で生活
久保田万太郎に就く	記者と作家の食い違い
岩田専太郎の幸運	映画と川口松太郎
三益の楽屋で一回分	名作の裏がえし
軍部に睨まれる	時局認識の旗印
V 丹羽、石川の戦争受難	
——傷だらけの新聞小説——	344
「よっしゃ」と連載	十万枚を超える筆力
情報局に睨まれる	相次ぐ発禁執筆停止
発行停止で脅迫	戦争と作家の眼
「生きている兵隊」の報道	したたかな文士根性
叔父石川六郎の助言	傷だらけの新聞小説

目 次

「勞苦と歎喜を一つに……」
吉野村通いの三年間に
歴史学と文学の間

執念の「新書・太閤記」
「新・平家物語」由来
「私本太平記」の構想

I 永井荷風の「濯東綺譚」

——木村莊八の挿画物語——

「朝日」荷風のすれ違い

「十一月十七日。快晴。午后日高君兩度來談。朝日新聞記者新延氏日高君と共に來り、拙稿濯東綺譚の原稿料金貳千四百余円小切手を贈らる。……此夜風なく暖なり」。

おなじみ、荷風散人の「斷腸亭日乗」昭和十一年の巻に、こうある。

昭和十二年四月、「濯東綺譚」連載に當って、『朝日』は「次の夕刊小説」の予告を出した。

「濯東綺譚、永井荷風作、木村莊八繪。

昨年末絢爛たる本紙の新春小説陣を發表しました際、永井荷風氏の登場を約束しましたところ、さき頃連載好評を博しました獅子文六の「達磨町七番地」の掲出中既に読者の熱望の声机上に山積する有様でありましたが、いよいよ近日掲載の運びになりました。寡作の文豪が執筆を快諾して半歳心血を注いだ精華で、描くところは大江戸の昔を偲び江東に舞台をとった目も綾なる風俗図絵であります。挿絵は近くは「霧笛」の名挿絵によってお馴染み深き春陽会の奇才・木村莊八氏の筆、荷風山人の珠玉の稿を得て一段の新機軸を試みるべく筆硯を新にしている見参であります。白熱の御期待に副ふものと信じて疑ひません」。

この社告を読むと、そのころの『朝日』の読者は夕刊の獅子文六の「達磨町七番地」が面白くないから、荷風のもの

のを載せろ、と要求したようにも受けとれるが、そうではあるまい。文六の「達磨町」はあれで、かれの出世作の一つといわれ、読者うけもよかつたはずであった。

『朝日』では新進作家に連載小説を頼むにしても、いきなり朝刊から小説を書かせるのは冒險だ、という意見が出て、まず、夕刊一面に当時の新進作家に二十五、六回程度の中編小説を書いてもらうことにした。第一回が片岡鉄兵「生ける人形」画・中川一政(昭3・6・7・7・21)三六回、十一谷義三郎「時の敗者」画・木村莊八(4・6・29・10・6)、林房雄「都会双曲線」画・中山魏(10・8・12・10)、川端康成「浅草紅団」画・太田三郎(12・11・5・2・16)三七回、武田麟太郎「銀座八丁」画・伊藤廉(9・8・22・10・20)、林美美子「泣蟲小僧」画・島崎鶏二(10・23・10・31)、片岡鉄兵「花嫁学校」画・鈴木千久馬(11・22・10・4・6)八〇回、坪田譲治「風の中の子供」(11・9・5・11・6)そしてこの翌年の一月の『朝日』夕刊から文六の「達磨町七番地」が宮田重雄の挿し絵で連載される——という具合で、この企画は作家にとっても、出世作のステップとなっている。このねらいはたしかに成功した。そのあとへ、待望の「溷東綺譚」の登場である。

『朝日』が荷風に連載小説を執筆してほしい、と申し入れたのは昭和十一年七月四、五日ごろ、「断腸亭日乗」は七月七日に「朝日新聞社、日高君を介して連載小説執筆を申来る。両三日前の事なり。長編小説をつくる気力なきを以て手紙にて辞す」とニベもない。

しかしこの年は

「三月三十一日、夜、浅草公園を歩み、乗合自動車にて玉の井に至り陋巷を巡見す」にはじまって、ほとんど毎月二、三回は葛飾から西新井、小松川、亀戸、玉の井を、巡見^{いまた}して、四月二十一日の日記にも

「晚餐後、浅草より玉の井を歩む。稍陋巷の形勢を知り得たり。然れども未^{いまだ}精通するに至らざるなり」とあり、翌

二十二日には

「玉の井の記をつくる」二十三日には

「午前執筆……晚餐後重ねて玉の井に往く。道順其他の事につき再調を要する処多きを知りたればなり」とあって、玉の井の娼家の精細なスケッチが描いてある。曰く

「玉の井路地真景、寺島町七丁目七番地京成バス車庫裏ヨリ入ル 大溝ヨリ向一帯 玉の井盛場ナリ 丙子四月二十三日夜八時写 金阜山人」。

このあたりになって来ると、荷風散人の玉の井通いは、もはや偏執^{チマニア}めいて来る。日記は、小説執筆の取材ノートのような役割をも果たしている。

そして、「朝日」から連載の話のあった七月ごろには、玉の井のノートはほとんど出来上がっていた。それにもかかわらず、荷風は「朝日」の連載申し入れを拒否しているのだ。

「朝」「読」の荷風詣で

一方、「朝日」学芸部では、それまでの荷風係りが、後醍醐院良正記者から新延修三記者に代っていた。七月に連載をたのんだのは後醍醐院記者だったのだろう、そのあとを引きうけた新延の最初の荷風訪問は「先生おりませんよ」とやられた。それでは、ということで新延記者は、玄関から裏口へまわって、ドンドンと手で叩いてみた。荷風は稀代の新聞記者ざらいだから、内からのぞいていて、それで居留守を使おうとしているな、と新延は思ったから、五分ばかり粘って戸を叩きつづけた。そうするとコトリと音がして、錠前を外したらしく、中から馬面ともいえる、荷風の写

真で見知った顔が覗いた。以下新延が「朝日新聞社の作家たち」に書いているところによると――

「先生、いま、いませんよ」

ヌケヌケと荷風は自分でそういった。

「冗談じゃありませんよ。僕、あなたのお顔は、いろいろの写真を見てよく知っていますよ。折角来たんですから、ちょっと中へ入れて下さい」

荷風はうすら笑いを浮かべながら、素直に僕を招じて呉れた。家の中は薄暗かった。やたらと家具やら何やらが場所をふさいでいた。通路といえる空間は、一人がやっと通れる程だった。裏口から玄関へ出ると、そこから二階への階段があった。可成り、急な階段だった。

二階の表によったところに、僅かに畳敷きにして三四畳位の空間があった。そこに、粗末な木製のイスが二、三脚とテーブルがあった。相対して坐ると

「僕、永井です」

と、律義に、名乗るではないか。

おかしくなつて、僕は社の名刺を差出しながら、ニコニコした。

そして、単刀直入、

「社からお願ひしてある小説、もう大分お出来になつてるんでしょうね」
と切り出した。

「それはあなた、頼まれはしましたけど、まだ書くか、どうか、決心もついていませんし、第一、何を書くか、材料も何も考えていませんよ」

「社としては何をお書きになっても結構なんです。これこれの人物を書いてくれとか、どうか、何の注文もつけていないのです。永井さんが、一番お書きになりたいものを書いていただければ、それで結構なんです。但し、僕としては、一日も早く連載させていただきたいのです」

そんな風な会話を交わして、書くとも書かぬともいわぬうちに帰ってきた。

それからの僕は、日に一度は、偏奇館を訪れた。そして、玄関の少し手前で、二階にいるであろう荷風に呼びかけるように大声で

「朝日の新延です。またお邪魔に上りました」とやった。

——ところが、そのころの「日乗」をみると、『朝日』と前後して『読売』も、荷風を訪問している。昭和十一年八月三日の項に

「午后日高氏朝日新聞社社員と共に来訪せらる。嘯下読売新聞記者来談」とある。つづいて

「八月十八日。午後改造社社員、読売記者来訪、いづれも原稿の催促なり」。

「八月二十四日。晴。残暑甚し。午后読売記者また来訪」。

「九月十四日。午后読売新聞記者来訪」。

「九月二十一日。午后読売新聞記者来訪」。

とまことに、読売の執筆依頼攻勢は熱心かつ執拗である。しかも、この九月二十日には、

「今宵もまた玉の井の女を訪ふ。この町を背景となす小説の腹案漸く成るを得たり」と日記に書いたように、「瀧東綺譚」を書く気持ちがかまきり、読売記者の来た翌二十一日の日記にはいよいよ、

「……雨歇まず虫の声頻りなり。燈下小説起稿」とあり、その翌二十二日は、玉の井のいつもの家にゆき、日が暮れてから銀座にもどり、食事をして、「帰宅後小説執筆午後三時に至る」と日記にあるように、執筆に油がのり出したようである。

さて、荷風散人、この調子ならば、この「溼東」を『朝日』にのせるつもりで書いているのか、と思われるのであるが、どうも、そうでもないようだ。九月二十三日の日記には、こうある。

「九月二十三日。去七月頃朝日新聞の記者某氏日高君を介して小説の寄稿を求めしことあり、其時は曖昧の返事をなし置きしにいいよ来月中旬より拙稿入用の由申来りし故、病に托して辞退したり。余は菊池寛を始めとして文壇に敵多き身なれば、拙稿を新聞に連載せむか、排撃の声一時に湧起り、必ず掲載中止の厄に遭ふべし。余はまた年々民衆一般の趣味及び社会の情勢を窺ひ、今は拙稿を公表すべき時代にあらうと思へるなり」。

つまり、荷風は九月下旬には、「溼東」の『朝日』連載は乗り気ではなく、そのくせ、せっせとこの小説を書きつづける。

こういう心境の散人を、またしばらくたつと、読売記者がアタックするのだ。

「九月念九。午前執筆。午后読売記者来りて寄稿を強ゆ。執拗厭ふべし」とやられている。

しかし、小説の方は、連日「執筆」している。

「九月三十日。小説執筆薄暮に至る。今宵は十五夜なり。……玉の井に少憩し十二時頃帰宅」。

「十月初一。夜、玉の井に往きいつもの家に憩ふ。十時半帰宅。燈下また執筆」。

「十月初二、午後執筆一二葉にして忽ち黒甜郷に遊ぶ」。

「十月初三。富士見町の桔梗家に夕餉を食してかへる。露寒し。燈下執筆」。

「十月四日。午后執筆。幸にして訪問記者来らず。薄暮……溷東陋巷の女を訪ふ。」

ここで、日記にはじめて「溷東」の文字が出て来る。これについて、つぎに考えてみたい。

「終日執筆更に倦まず」

「溷東綺譚」単行本の「作後贅言」で、作者はこう書いている。

「溷」の字は林述斎が墨田川を言現すために濫に作つたもので、その詩集には溷上漁唱と題せられたものがある。

……成島柳北が……向島須崎村の別荘を家となしてからその詩文には多く溷の字が用い出された。……柳北の死後に至って、いつともなく見馴れぬ字となった。

……寺島町五丁目から六七丁目にわたった狭斜の地は、白髯橋の東方四五町のところに在る。即ち墨田堤の東北に在るので、溷上となすには少し遠すぎるやうな気がした。依つてわたくしはこれを溷東と呼ぶことにしたのである。

溷東綺譚はその初め稿を説いた時、直ちに地名を取つて『玉の井雙紙』と題したのであるが、後に聊か思ふところがあつて、今の世には縁遠い溷字を用ひて、殊更に風雅をよそはせたのである」。

これによつてみると、九月二十日、起稿してからすくなくとも十数日間、作者は「玉の井雙紙」の題名で小説を書いていたわけである。

「十月五日、小説の稿漸く進む。夕餉して後銀座にて買物をなし玉の井に立寄りて帰る。燈下また執筆一時過寝に就く。」

「十月六日。筆とらむとする時、日高君朝日新聞記者某氏と相携へて来る。談話一時間半ばかり。家に在らばまた

もや訪問記者の来襲を蒙るべしと思ひ倉皇洋傘を携へ浅草に行く」。

「十月七日。終日執筆。命名して濯東綺譚となす」

——と、ここに至って、ようやく題名がきまるのである。さて、この六日の日の「朝日記者某氏」すなわち新延修三の、荷風訪問の文章を、前につづけて見ると

「当時、永井の秘書みたいなことをしていた日高基裕と同道したこともある。

それから半年も経たないうちに

『書きましよう。しばらく待って下さい』

という返事を得た。

日高からは、刻々、情報が入った。

『どうやら、大分、書き進んでいるらしい』。

そのあとの断腸亭日記は、執筆と玉の井行きの繰り返しである。荷風の小説に対するひたむきな執念を思わせる日記である。

十月九日。執筆例の如し。

十月十日。草稿執筆。餘事なし。

十月十一日。朝より濯東綺譚の草稿をつくる。夕餉の後寺島町に往く。

十月十三日。執筆例の如し。

十月十四日。草稿執筆更に倦まず。晩食の後一睡。覚めて後また草稿に筆を執る。

十月十五日。午后執筆。夜また玉の井を歩む。十一時帰宅。また机に向ふ。

十月十六日。晴れて風なければまた落葉を焚く。執筆例の如し。

十月十七日。終日執筆。夜銀座より溷東に往き十一時頃帰宅。

十月十八日。執筆例の如し。

十月十九日。雨ふりしきて終日やまず。この日昼夜家を出でず溷東綺譚執筆。

十月二十日。雨暮方に至りて始て霽る。夕陽燦然たり。溷東の遊興猶失せず。夜また往きて例の家を訪ふ。帰宅後執筆。曉二時に至る。

十月二十一日。晩食の後執筆二三葉。出でて銀座茶房に一茶する。

十月二十二日。改造社、読売新聞いづれも人を遣して拙稿を需む。何の心なるを知らず。終日執筆。夜また溷東に遊び……。

十月二十四日。終日執筆。

十月二十五日。日曜日晴れて暖なり。溷東綺譚の草稿成る。(欄外に「溷東綺譚説稿」と朱書)。

十月二十六日。草稿を添てん欄す。

十月二十七日。十三夜の月よし。溷東を漫步して夜半に帰る。

十月二十八日。拙稿溷東綺譚を朝日新聞夕刊紙上に掲載する事となす。

そうして、原稿を浄書して「朝日」に小包で送るのだが、それが新延記者の文章と断腸亭日記とは食いちがっている。

原稿料をめぐって……

新延記者は次のように書いている。

——一月末だったろうか。

朝日新聞学芸部御中と書いた油紙で包んだ荷風原稿が、書留便で届いた。

取る手おそしと開封して見ると、手紙は入っていないくて、溍東綺譚、永井荷風とサインした原稿だけが入っていた。小包の宛名に、新延と書いてなくとも、せめて、僕あての小文が同封されているはずだと思うから、僕は内心不服だった。

だが、待望の小説が、確実に入手出来たのだ。鬼の首をとったような喜びが身体中を走った。

ところで、早速原稿を読んでみると、一回二回のけじめがまるでついていない。ただ、八、九十枚の原稿がだらだらと書き続けられているだけではないか。

これを、新聞に連載するには、一回三枚半が原則だが、どこで、どう切るべきか、至急、研究しなければならない。すると、その時、日高から電話がかかって来て

「先生は、原稿は返すこと、それから原稿料は一日も早く持参するようにとのお話です」という。

新聞小説の原稿料は四百字詰一枚いくらではない。一日一回分いくら、と勘定することになっている。そして荷風には当時の最高の一回七十円を支払うことも約束してある。

そこで、単純に、八十枚足らずの全文を、一回三枚半の計算で割り算してみると、二十二回分しかない。しかも、

荷風は金にはキタない位、食欲だと聞いてもいた。

部長と相談して、原稿を書き移しながら、一回一回の切れ目を勘案して、工場渡しの原稿を作るようになった。

そのためには、社内は雑然としすぎている。もしもの事に、原稿が汚れたりしては申し訳ないからと、下手な理窟をつけて、僕は社を休んで、当時、開業したばかりの東横線綱島駅前の綱島温泉ホテルというのに三日通って仕事をした。

最初、全文を読んで見て、ウームとうなった。実におもしろい。おもしろいが、舞台には朝日新聞にそれまで出た事もない私娼窟の玉の井が舞台であり、私娼のお雪が主人公ではないか。

あるいは、もしくは、内務省の検閲係から文句をつけられたら、どうしよう。

よしっ、これは、原稿を取って来た僕一人が責任を負うことにしよう。しかし、連載だけは、どうしても果したい。全文を一回ずつの分量に区切りながらの作業を終ったところで、僕は、「一身上の都合により退社いたしたく」という辞表を書いて、堅く密封したものだ。

一回分を作成する作業も困難を極めた。何しろはじめにいったように、ソロバン勘定で行くと、二十二回が精々である。しかし、僕としては折角の名作をものしてくれた荷風の労に酬いるため、一回分でも、二回分でも、回数を永くして、その分だけ稿料をはずんで渡すようにしたい。

だから、当時連載した字数か行数を勘定してもらおうとすぐわかる。一回分、三枚半を使ったのは、ホンの一、二回分だけである。大部分は三枚位で一日分とした。その秘密は、なるべく行改めを、**“無断”**で多くしたことである。ひどいのは、二枚八分位のもあるはずである。そして工場に頼んで、行間のインテルをなるべく厚く入れてもらうことにした。